

座小田豊先生への質問・コメント	
講義内容について	
質問 J	問題設定から、かつては限られた比較的多様性が少ない中で生活していたのが、多様性が爆発的に増えた現代で生活するようになりました。人間が「私」を、他者との違いから見出すならば、現代は私が私であると見出しやすい時代なのでしょうか。（しかし現代は自分から見える他者が膨大になり、自分がその中に埋没しているように思えます。単なる感想のようですが）
回答	かつてと今とでは、多様性の質が違うということでしょう。かつては人間対自然との関係において多様性が語られ、現代では人間同士の関係において多様性が語られているように思います。多民族、多文化、多言語、いろいろありますね。そのような多様な人間たちの間で、私たちは、却って自分の主体性を見失ってきているように思います。それはなぜでしょうか。考えてみてください。
質問	他者を認識することで初めて「私」を認識することができるため多様な他者が多い方が「私が豊かになるということは昔のモノクロームな人生を生きていた人よりも今の方が豊かな「私」を持ち豊かになっているのでしょうか。
回答	合同講義の際に口頭でJの質問に答えておいたように、他者を広く自然までも含めて考えた場合、自然の様々な動植物を目の当たりにしていたかつての人たちは、対自然という多様性の捉え方のなかで「人間」について固有の「私」の理解を得ていたと考えられます。
質問	「私が私である」という自己同一性を獲得するためには、多様な他者が必須であり、「私」が自分らしく生き主体性を發揮するには多様な世界に身を置く必要があるのだと思った。かつての空間的・時間的に制限されたモノクロームの世界の人々は現在の多様な世界に生きる私たちよりも主体性を発揮するのは難しかったのでしょうか？
回答	上の質問者へのコメントを参照してください。「主体性を発揮するのが難しかった」というより、「主体性」のあり方が異なっていたと言うべきでしょうね。
コメント	subjectus という subject の語源からして、常に「他者」を意識するものであることは興味深かった。多様であることにより自分を省みることが大切だと強く感じた。
回答	ある概念の歴史的由来を知ることは、他文化と深く接触しようとする際には必ず求められる態度だと思います。横のものを縦にするとはよく言われますが、それさえも語源的由来を踏まえたうえのことあるべきでしょうね。
コメント	多様性という言葉を哲学的な観点から考えてみたことがなかったのでとても面白かったです。
回答	ものの観方にも多様性がありますので、いろいろな視点で、物事を見据えるようにしてください。どれほどの数かはともかく、「複眼的に」！
質問 K	「違い・差異」から「差別・蔑視」へと変化してしまうものと、ただの「違い・差異」でありますづけるものとでは、何が違うと思いますか？
回答	講義のなかで応答していますので、参考してください。
質問	もし人間が一個体がそれぞれの意識を持っていながら、他者との差異を認識せず（それを苦とも思わず）、人間全体を「私」と認識したとしたら、どんな問題が起こると思いますか？他の動物や植物との差異は認めるとして、そこに今以上の「差別」などは起こりうると思いますか？（人間という種の中の多様性はなくなると思いますが、人間全体が同じ「私」という意識を持てば他者のことをより深く考え、全体のための行動が増えると思います。）
回答	仮想の話ですね。「人間全体を「私」と認識する」とはどういうことでしょうか。所属する集団、例えば家族や、社会や、国家、あるいは全世界との一体感こそが「私」だということでしょうか。その場合であっても、少なくとも、その一体感を意識する、個的な「私」が実感されていなければならないのではないでしょうか。そうでないような「全体」であるなら、そこに他者も個体としての意識も存在しませんよね。そのようなものは「全体」とさえ呼べませんね。「全体」と言えるからには、個があり、「私」があり、他者たちがあるのでなくてはなりません。あるいは、「宥和的な共同体」といったようなもののことを考えているのでしょうか。そうであっても、他者も、したがって差異も、決して存在しなくなることはないと思います。また、全体を私と意識するとして、その私と各人の個別「私」との関係はどのようになるでしょうか。全体の私に吸収され解消されるなどといったことが生じるとすると、それはもはや「全体」とも呼べなくなると思います。「家父長的」な組織のことを考えているのでしょうか。あるいは、全体主義的な独裁国家のことが念頭にあるのでしょうか。後者ではないことを念じます。
質問	「異常者」を「異常者」として差別するのは自分は異常ではないという安心を得たいだけなのでは？
回答	構造的にはその通りだと思いますが、それで「安心」を得られるかどうかは疑問ですね。本当の？異常者は決して安心できないのではないかでしょうか。

コメント	自己の奥深くに差別意識は存在すると思う。蔑視はしないにしても、白人・黒人という呼称・見方があることを考えれば、やはり差別意識はあるのだと思う。
回答	「差別意識」と「差異性の意識」とは区別した方が良いと思います。白人・黒人・黄色人というのは区別であって、そこに「差別」を助長する契機が存在することは確かですが、直ちに「差別」と等置できるものではないと思います。たとえば、白色と黒色のマジックを手にして私たちは「差別」を意識することはできませんよね。
コメント	モリソンの描く差別関係はホモソーシャルと似ているように思った。
回答	どのような意味で似ているというのでしょうか。あなたが「ホモソーシャル」をどのように考えているのか、聞いてみたいと思います。
質問 L	「同一性と差異性との同一性」がよくわかりません。他者との同一性と差異性を認識することによって自己同一性が確保されるのは理解できますが、それが上のように表わされるのはどういうことなのでしょうか。
回答	講義のなかである程度答えていると思いますので参照してください。
質問	他者や外界との関係からでのみ主体性を自覚するのなら、それが制限された状態、例えば非常にマイノリティな民族で家族単位のなかで一生を終えたり、大事に育てられ一生箱入り娘になってしまった人などは、極端にいえば主体性がほとんど育まれないのでしょうか。自己があつて思考能力があれば、ある程度の主体性はあるような気がします。
回答	日本人は自己主張が少なく、したがって「主体的な」考え方方に乏しいとよく言われます。いわゆる同調圧力の強い社会のなかで、均質な思考を強要されるところに大きな原因があるように思います。閉鎖された家族の空間のなかだけというのは、実際にはなかなか考え難い状況だと思いますが、そうした状況があったとして、やはり「自己意識」の在りようは「私」ではなく「私たち」（家族）という形をとるのではないかでしょう。
コメント	他人から見た自分を知ることが自己認識につながるのなら、ネット上に身をうずめている人たちの同士の自己認識は文字や中途半端で不確かな情報のみでしか確認できないのではないかと思ってしまう。しかし、それにも関わらずそこで生活できるのは直接のコミュニケーションと同等以上のものがネット上でできて、自己認識を満足にできているのだろう。
回答	満足した自己認識とは、どのようなものなのでしょうか。ネット空間のなかだけで自足しているということは、単なる自己満足ではないでしょうか。他者との直接的な接触を回避した、自己欺瞞あるいは、自己逃避と言ったほうが正確かもしれません。他者を広く取って人間ばかりではなく、この世界に属するすべてのもの、と考えるなら、ネット空間のいびつな明白ではないかと思いますが、どうでしょうか。外に出て、手で触れる土や植物や昆虫、太陽の光降り注ぐ海辺の砂浜などを実感してみてはどうでしょう。
コメント	多様な他者を見つめることで、自分の中にある多様な側面に気付き、思索に豊んだ（だからこそ苦しい）生になる、ということかな、と思った。
回答	「自分のなかの多様な側面に気づき」までは、その通りだと思いますが、その気づきの後に、何でもかんでもではなく、そのなかから望みうる契機を選び取り、それを自分のものとすべく努めるという作業が続くのではないかと思います。それは、苦しくもまた、楽しくもあろうか思われますが、どうでしょうか。
コメント	「他者を己として知ること」とは、自己と他者の差異と類似性を認めることなのかなと思った。
回答	その通りですね。他方で「己を他者として知る」という契機も必要ですね。「自分は自分」であり続けますが、その「自分」の中身がまったく変わらないということは不可能ですね。変化し、成長する己を見つめるためにも「他者を己として知ること」が必要になるのだと思います。
質問 N?	多様な他者たちを合わせ鏡にして初めて、人は自分の後ろ姿を省みるものができるとあるが、世阿弥の離見の見のような考え方によって自分を一步引いたところから見て自己分析をすることは、不可能なのだろうか。
回答	「自分の後姿を省みる」というのは、多少なりとも他者との直接的な接触から離れた視点を必要とすると思います。そうすることで初めて、そこに「差別意識」や「ヘイト」といったものが介在していないかどうか、確認できるのではないかでしょうか。
コメント	他者・多者によって自分は自分の姿を確認できるという考え方非常に共感できた。自分を取り巻く環境が変わることで、新たな自分に気づくというのも往々にしてあることだろうし、事実、皆がそういった体験をしていると思う。そういう点から、世界が多様であるほど自分を明瞭にできるのだろうと感じた。
回答	共感してもらえて幸いです。卑近な例を挙げるなら、私にも「ヒトに対する好き嫌い」がありますが、出来るだけ「好き」だと思える人のようにありたいと考えています。むろん「嫌い」な人のようには決してなるまいと思いますし。できるなら、自然の豊かさ、多様さに埋もれてみたいとも思っています。

質問	個としてみれば別であるとしても、クローンが個を確立することは困難だろう。できるとしたら環境を変えて表現的多様性を変えるほかないのではないか。
回答	先日東北大大学の川渡農場で、クローンの牛を実見してきました。クローンもまた個であることには確かだと思いましたね。
コメント	自分が一体どういう存在なのか、どのようなものなのかを考える時、常に自分自身が描く自分が自分であると思っていたが、よくよく考えてみると他者からの褒め言葉や悪口などを自身について考えてみる時に思い浮かべる。あるならば自己を認識する際には多様な他者との関わりが重要なのは合点がいって納得できた。
回答	自分が自分であることのかけがえのなさは言うまでもなく肯定されなくてはなりませんが、そうした独自性（という概念）もまた、他者と共有されているのだということに眼を向けなくてはなりませんね。他者の独自性を尊重してこそ、自分の独自性も輝くということではないでしょうか。
質問 M	他者を自分と認めることが自己という人間を認識するということがよくわからなかったです。
回答	この質問については、講義のなかで取り上げて答えたつもりです。参考してください。
コメント	他者との差異性によって自己同一性が確保されるというのは大変興味深かった。多様性の重要性がよく理解できた。
回答	そのように理解したうえで、多様性や異質性に対して「寛容」でありたいのですね。
質問	他者が自身を表す鏡で独自性が多様性と密接に関与しているとおっしゃいましたが、自身が他者に与える影響も考慮することで真に他者の中の自分が見え主体が確立されていくと私は思います。しかし、他者への影響を考慮し作られる自我の中に'自分らしさ'というものは完全に含まれるのでしょうか？（興味深いお話をありがとうございました。）
回答	その通りですね。相互に影響を与え合う、それも多数の他者との間で、というのが普通の状況なのでしょうね。そのなかに埋没してしまって、自意識過剰になったり、反対に自分を見失したりするなかで、例えればいじめに遭ったりするという厄介な状況が生じるのではないかと思います。できるなら、他者の影響のただなかで、屹立する「おのれ」を掴みたいのですね。忖度も同調圧力も蹴飛ばしましょう。
質問	自分の眼で自分を見ることができない（人格を映す鏡はないから）から自分以外の物、者を見て比較することでしか自分を認識できない、が、また自分が何者であるかは自分以外の物、者に大いに影響され、自分自身はそれまでに触れた全ての物、者を混ぜこぜにした物なのではないか、というのが私の持論です。自分らしく生きるために、多様性と付き合った結果、自分は変わるものか、あるいは発見できていなかった自分を見つけていくのか、「自分自身についての理解が変わる」だけで自分そのものが変わっていくことはないのか、座小田先生はどう思われますか。
回答	結局「自己」は他者から得られた情報のパッチワークでしかない、というのでしょうか。たとえそうであったとしても、それを「自己」として捉えることができる「私」を自覚し意識できるのなら、その「私」を「自分」と認めていいのではないかと思いますよ。「自分自身の理解が変わる」ということは、自分が変わっていることにはかならないと思いますが、どうでしょうか。そうでないなら、「理解」という言葉を使うのは相応しくないでしょうね。
質問	人が「自然的共同存在」であって、多様性を通してまわりから自分を知ることができるなら、現代の方が、自分・自己を正しく認識し、多くの人が自分らしく生きられるような気がするが、実際にはそうなっていないように思えるのはなぜでしょうか？
回答	多様性に困惑され、惑乱されているからだと思います。少なくとも、溢れ返っている情報の洪流を統御する術を、まずは身に着ける必要があるでしょうね。しっかりと大地に根を張るべく心がけてください。
コメント	人間論の観点からの考察がおもしろかったです。自分自身についてもう一度考えてみようと思いました。
回答	「人間」をどのように見ているのか、という視点が、自分を考えるうえでもとても大切だと思います。自分は「人間」だと思わない人はいないですから、「自分は一体どのような人間であろうとするのか」と先ずは問い合わせてみることが大切だと思います。
コメント	自己同一性というものが現代の多様性の重要性を肯定するに非常に良い観点であると感じた。多様性の問題は、差異性に優劣を付ける場合があることだ。
回答	その通りだと思います。差異性を差異性として認めて受け入れることでしか、自己同一性は確保できないのだと思います。「差異性に優劣を付ける」ということは、多様性に序列をつけることにはかならないわけですから、このような差異性を多様性と呼ぶことはできないはずでしょう。

講義内容以外について	
質問①	1) 主体性は存在しうるか。自立的思考をするのが主体であるならば、多様性・他者の影響を受け、同一性を確認するのは「自立的」なのか。2) 多様性の輪の中に、自立的思考の末に「多様性は要らない」という考え方を持つ者がいることは承認できうるだろうか。仮にそのような者を拒否するならそれは、多様性が多様性を否定することにならないだろうか。
回答	1) については、それは「自立的」だと言えるでしょう。2) については「多様性は要らない」という主張もまた許容するのが多様性が認められる社会の基準になると思います。実際のところ同調圧力に打ちひしがれて、ナショナリズムに走ることもあるのでしょうか。それは「自立性」とは言えないでしょうね。講義の際の私の意見も参照してください。
コメント	普段の授業より有意なものでした。
回答	テーマが明確だったからでしょうね。普段の授業ではもっと内容の濃い話をしているつもりですが、それだけ難しいということでしょうかね。